
女の子の俺は俺で！？

御幣 橋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子の俺は俺で!?

【Nコード】

N0629BA

【作者名】

御幣 橘月

【あらすじ】

俺は『宮永 優』（ミヤナガ ユウ）。

ある日、俺は新人類へと進化した！

……あ、いや新人類と言ってもニューハーフとかじゃないんでー。別にこれといったスーパー主人公補正的な特殊能力とかもないんでー。

いや……まあ朝起きたら女の子になってたってことぐらいかな？

……えっ？ 充分特殊だった？

ちよつ！ やめて／＼！ 恥ずかしいから誉めないで！

そんなこんなで幕を開けた優の波乱の日々はこれからどうなるのか？

拙作ですが良かったらお茶でも飲みながらまったりと見守ってやってください。

1月7日、累計2000PV突破。皆様ありがとうございました。

プロローグ『目覚めると……』（前書き）

この物語はフィクションです。

実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけたら、報告していただくとありがたいです。

プロローグ『目覚めると……』

朝

ジリリリリ。

けたたましい目覚まし時計の音と共に彼、ミヤナガ ユウ『宮永 優』の新たな一日が始まる。

「……ふあー……もう朝かー」

寝ぼけ眼で枕元に置かれた目覚まし時計を止める。

「って！ もうこんな時間じゃん！」

時計の針はきっかり午前八時を指していた。

「くっそー！ 入学式でいきなり遅刻なんてごめんだ！」

優はベットから飛び起きて、急いで支度を始めようと、立ち上がったが……。

「うわっ　　いてて……」

無意識に『身体の違和感』を感じ、バランスを崩し、ベットから転げ落ちてしまう。再度立ち上がるうとするが、何故かバランスがとれず、傍目からみるとその様子はまるで、生まれたての子馬が立ち上がるうと、必死になっているように見えた事だろう。

「　　なにこれ！？　ど、どうなってるの？」

そう。その優の視線の先には有り得ない物が、……男の子の優には有り得ない物が確かに有った。

遡ること四時間前

優の部屋には怪しい二つの人影があった。コソコソと忍び足で動くその人影は部屋の主に悟られまいと、押し殺した声でひそひそ話をしていた。

「……き、緊張するよママミー！」

「……全く。アナタが緊張してどうするのよ！」

「だ、だって……」

「もうここまで来たのだから、ヤル時はやっちなさい！ アナタそれでも男？」

「わかったよ！ これでも僕も男の端くれだからね！ ヤルとなったらやっちなよ！」

「それでこそアナタ。流石私のダーリンね」

「……けど今更ながらコレって優君本人に了解取らなくていいのかな？」

「いいのいいの。言ったら絶対にこの子嫌がるでしょう？ それに私達の子供なんだから何やっても平気よ」

「……ははは……相変わらずママミーは手厳しいね。それでこそママミー。その手厳しさ堪らないよー！」

「はいはい。……ほらちやっちやとやっちやいなさい！」

そんな会話を行っている声の主は『ミヤナガ サトシ宮永 聡』と『ミヤナガ カナメ宮永 要』。
優の両親である。

そして何故、両親が声を押し殺してひそひそ話をしているのかと言つと、2人のその手に持たれた怪しい物体に理由が有つた。

試験管に入つた液体の“ソレ”はボコボコと音を立てて泡立ち、色は紫色という、毒薬にも見えるものだった。

「遂に僕達夫婦の研究の成果が実るんだね！」

「ええ。さあその試験薬を優に注射しなさい」

「フウツハツハツハー！ 我こそは狂喜のマツツッドサエンティスト！」

「ダーリン！ 大声出さないの！」

「え？ こういうのいらないつて？ って痛い痛い！ 痛いよママ
ー！ 注射器をお尻に射さないで！ アーッ！」

器用に小声で悲鳴をあげる聡であつた。

試験管から注射器へと移される“ソレ”は不気味な紫色の煙を上げる、試験薬とやらだった。

「い、いくよママミー！」

「ええ」

緊張と期待の入り交じつた興奮を隠せぬ聡が、注射器を『ブスツ』と優の腕へと射し、紫色の液体が優の身体へと、吸い込まれるように入っていた……。

そして現在

「……あつ！ そつかそつか！ 俺はまだ夢を見ているのか！」

頭に電球マークと「ピンポン」という効果音が付きそうな程に見事に閃いた？（所詮現実逃避）優はなんとか立ち上がり、気にせず顔を洗うために一階の洗面所へと向かう（優の部屋は二階）。その洗面所へと向かう途中も終始足元が覚束ない千鳥足で歩きつつ、階段へと辿り着く。手すりを掴みながら慎重に慎重に1歩ずつ階段を降りていくが……。

「こけっ！」

鶏の鳴き声の様な悲鳴（？）と共に転がり落ちていく優。

その中で重要な事に気が付く。……そう。男なら誰でもわかるであろう。恐怖を感じた時に縮み込む“男の子のシンボル”が無くなっている事に。

その時の優の顔といったら、階段から落下する恐怖よりも、“男の子のシンボル”が無いことに気が付いて、奇々怪々とした表情をしつつ落下していったのであった。

「……いたたた……全くなんなんだよ！ 夢なんだから痛いのかおかしいだろ！ ふざけるなよ階段！」

……つと余りに“男の子のシンボル”が無くなっている事に動揺したのか、意味不明な八つ当たりをしながら、未だに「これは全部

夢なんだ！』と現実逃避をしながら洗面所へとやっとの思いで辿り着く。

「……つたく、なんなんだよ本当に！ 今日で俺死ぬんじゃ……」

つと頭をポリポリと掻きながら鏡を見る。

「……えっ？」

優が固まる。

「……はっ？」

瞬きをたっぷりとしてから眼をゴシゴシと拭い、小首を傾げる。

「……？」

だが鏡に映る“美少女”も同じように小首を傾げるだけ。（当たり前前である）

「えーっと……初めまして？」

ペコリとお辞儀をする優に“美少女”もペコリとお辞儀をする。

（いや、だから当たり前だからね）

「……き、今日はいいお天気ですね？」

パニックのあまり、天気の話をし始める優。……だが洗面所から外は見えないうえに、今日は生憎の曇天である。

「あ、いきなりすみません。俺の名前は宮永 優って言いまして……
って……ハッ！」

そう。ここに来てやっと自分がどうなっているのか、気が付いた優であった。(いや、だから現実逃避だって)

「そういえば俺って女の子だったんだっけ……ってそんな訳あるかっ！」

こいつノリノリである。

「まあ女の子になったのは今は遅刻しそうだから一先ず、横に置いておくとして……」

こいつなかなか大物である。

「よしっ！ 気合い一発！ 洗顔しちやいますか！」

何事も無かったかのようにそそくさと洗顔を始める優。なんと神経が図太いことか……。

「ふーっ。やっと目が覚めてきた……うわっもう十分じゃんヤバイ！」

洗顔後、時間を確認するために壁に掛けられた時計をチラッと見る。すると時間は既に8時10分となっていた。学園の登校時間は8時30分迄と決められていた為、その後は遅刻扱いになってしまう。

「まずい……早く着替えなきゃ！」

だいぶバランスも取れるようになったのか、躓きそうになりながらも、なんとか階段を駆け上がり自室へと向かう。

「えーっと制服はクローゼットの中だから……あれ？　そういえば制服はどうすればいいんだ？」

そんな疑問と共にクローゼットを開くとそこには真新しい制服が掛かっていた。

「……なんだこれっ!？」

そう。なんと掛かっていたのは女子生徒用の制服だった。

「昨日は確かにちゃんと俺の制服が掛かってたよな……?」　そんな事を思いつつ、制服を観察していた時にふと、その制服の首もとのリボンに何かのメモが付いていることに気が付く。

「まったく……どうせ姉貴かなんかのイタズラなんだろう……まったく」

優の姉、ミヤナガリン『宮永 凜』。凜は優の姉であり、事あるごとに優に対してイタズラを仕掛けてくる事がある。

凜曰く「私は優君の事が好きなのだ！　取って食べたいくらい大好きなのだ！」と、これまた冗談なのか、本気で言っているのかわからない怪しい発言をしている。

今までに凜には様々なイタズラをされてきて、優は凜に対して常に警戒するようにしていた。

……そんな警戒心を嘲笑われたようで、悔しがりながら周囲を警戒しつつ、メモを手取る優。

「えーっと……なになに……優君が眠っている隙に……」

そこには驚愕の事実が書かれていた。

それは

「優君が眠っている隙に、試験薬の実験体になってもらったんだけど失敗しちゃった。てへっ！ それで優君は女の子になっちゃったんだ。お父さんは優秀だから失敗に備えて女の子の方の制服も密かに買っておいたんだ！ 流石お父さんだろう？ お茶目なお父さんより」

「えっ？………なんだって」

色々ツツコミどころが満載だったが、一先ず状況を整理しようとして落ち着こうとしたが、今更になって自分が“完全無欠の女の子”になってしまったことに、自覚し（どうやら大物ではなく鈍過ぎるだけのようだった）、急いでクローゼットの全身鏡の前に立つ優。

「……いつ……」

そして改めてマジマジと見ると、そこには驚く声を発したままの形で固まった美少女が映っていた。

長く伸びた艶々の黒髪にキリっとした二重。それでいて鋭い目ではなく、クリっとした大きな目。肌はとても綺麗なシミひとつない真っ白な色をしているが、不健康には見えない程度にほんのりと赤く、見るからにきめ細かく、スベスベとしている。そして先程、優が驚愕していた男の子には有り得ない物……そう、それは胸であった。その胸はこれでもか！ と言わんばかりの自己主張の激しい豊かな双丘がたゆんたゆんと揺れていた。

「ってこんな大きな胸してたらバランス崩すな……ははは……」

半ば呆れつつ、冷静に今までバランスを取れなかった、大きな要因に気が付いた。文字通り“大きな”である。今までになかった大容量の胸がいきなり付いていたら誰しも、平行感覚が崩れるであろう。自然と前のめりになり、これまでは身体が無意識にバランスを取っていたが、無意識の許容範囲を越えている為に、そのまま前方へと倒れてしまうのだった。

そして今、この光景だけを第三者に見せて、その感想を一言で表すとするならば、まさに「容姿端麗」の一言に尽きるだろう。

「嘘……だろ？ って嘘じゃないんだよなこれ。……よし！ 確認の為にツネろう」

今までベットから落ちたり、階段から転げ落ちて、散々痛い目を見ていたのにも係わらず、すがりつくような思いで両頬を思いつきりツネる。

するとどうだろう。鏡の中の美少女は苦痛に顔を歪め、今にも泣き出しそうな顔をする。

「いたーっ！ ……ってそりゃそうか……」

どう考えても自滅行為を行う優であった。

そして美少女を観察していて、ふとあることに気が付く。

「んっ？ よく見ると俺のど真ん中ストライクで好みな顔してるな……？」

優は今の自分の姿がかなり自分の好きな姿であることに今更ながら気付いた。

「……ってそんなことより、取り敢えずあのクソ親父の奴とっちめてやる！」

メモを破り捨てようとした優だが、メモの裏にまだ何か書いてあることに目を止める。

「なんだ？ まだ何か書いてあるな……」

「追伸、今の優君の姿は優君が心の中で一番綺麗だと思う女の子の姿になっちゃってます！ やったね優君！ 後、お父さんとママは研究の為、今日から海外に行っちゃうから凜と二人暮らし頑張ってねー！ ちなみに優君の戻し方はわかりまてんっ！ なのでパピの親友の優君が今日から通う学園の理事長さんにはお話しておいたから安心して女の子のまま通えるよん。戻し方わかったらまた連絡するねー！ ばいびー！」

「なっ！ ふざけるなー！ ばいびー！ ってなんだよ！ どれだけ軽い別れの挨拶だよ、あのクソ親父のやつ！」

「……って、それより俺はこの姿のまま通うってのか!？」

そんなことをやっているうちにも、時計の針は刻一刻と進み続けている。

「あーっ！ もう！ とりあえず早く着替えないと」

そそくさと着替えを始めるが、なにぶん女子生徒用の制服など着た事がない為、手間取る優。

「ココがこうで、こっちがこうなって……!」

そしてある一つの疑問に辿り着く。

「下着ってどうすればいいんだっ!？」

「くっ……どうせ今日は入学式だけだし、このままでいいよな？」

女の子になってしまったただけなので、勿論ブラジャーは付いておらず、下はボクサーパンツという変な組み合わせである。仮にこんな姿を他人に見られたとしたら、喜ぶ人が多そうなので、困ったところでもあるが……。

「うう……なんかスカートだからスースーするけど、多分これでいいんだよな？」

鏡の前でクルッと一回りをしてみる。鏡の中の優はスカートをヒラヒラとさせ、とても今日から女の子始めました! というようには見えなかった。

「はあ……行つてきまーす……って本当に親父とお袋いないのか……」

玄関で通学用の学園指定の革靴を履きながら、両親の不在を改めて実感していた。

「とりあえず悩んでも仕方無いし、遅刻しないように学園に行かないとな……」

入学式への期待と自分が女の子になってしまった不安を胸に学園への道のりをひた走る優。

はあ……大変な事になったな。

そんな優の様子を、物陰から覗く視線があることに、優は気付いていなかった……。

第一話『す、すごくおっきいです』（前書き）

この物語はフィクションです。

実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけたら、報告していただくとありがたいです。

第一話『す、すごくおつきいです』

私立天雲学園

この学園が今日から優の通う学園だ。

日本一のグループ会社である、天雲グループの学園であり、幼稚園から大学までである。総生徒数は四千人を越え、学園の総敷地面積は琵琶湖二つ分もあり、天雲グループ傘下のコンビニやレストランは勿論のこと、スーパーにショッピングモール、住宅やタワーマンション、はたまた天雲鉄道の駅までもが学園内にあり、その為、学園の敷地内はさながら1つの街であるかようになっていた。

本年創立二十年目と、かなり歴史の浅い学園だが、日本政府より近未来型教育のモデル校に指定されており、教育は独自のスタイルを採用し、時代の最先端に行く最新の教育設備や、特待生制度（学業成績優秀者やアイドル、スポーツ成績優秀者の学費全額免除や専門家による個人指導）等も超人気校としての拍車をかけている。

主に家柄の高い者や名だたる有力企業の子息、令嬢、芸能人などが通う学園である。

優の家庭は研究者の両親とそれに姉のごく普通の一般家庭であり、格段家柄が高い訳でもなく、はたまた会社を経営している訳でもない。

なぜ優がこのような学園に通う事になったかというと、父、聡の唯一無二の親友が天雲学園の理事長であり天雲グループの社長でもある『天雲 京』^{アマクモ キョウ}が多いに関係しているのは言うまでもないだろう。

今まで優の一家は両親の仕事の都合上、日本各地を転々としていた。

そして天雲学園のあるこの三谷市ミタニシに來たのも、優が幼稚園を卒業して以來だろう。優はそれまでこの三谷市で生まれ育った。天雲学園の幼稚園に通っていたが、優の幼稚園卒業と同時に両親の赴任が決まり、まだ幼い優と凜は両親に付いていくこととなった。

その後も日本各地を転々とし、高校一年生となったこの春、三谷市へと帰ってきたのだった。

「うわーなんか懐かしい景色だなー！」

生まれ故郷の景色を眺めながら学園へと走る優。優の家は天雲学園の敷地内にある、住宅街の一角にある一軒家だった。この一軒家は優の両親が結婚した時に建てた物で、建てたはいいが、日本各地を転々としていた為に、数年程しか住んでいなかったのである。

「……はあはあ……やっと着いた……よし！ ギリギリセーフだ」

息を切らせながら校門へと駆け込んだ優。時刻は八時二十七分と遅刻間際の時間帯だった為か、校門周辺の人影は既に疎らだった。

そのままロビーへと向かい歩いていった所へ

「ちょっとそこのあなた」

優の背中へと掛けられる声。

だが優はその声に気付いていない。

「うわっ！ 銅像だー懐かしいなー！ この理事長の銅像とかによ

くイタズラしたっけなー」

そんな幼い頃の楽しかった思い出を振り返りつつ、スタスタと口ビーへ向かう。

その優の背中へ、今度は少々苛ついた高圧的な声音でまたも声がかけられる。

「ちょっと！ そのあなた！ 聞こえていますでしょうか？ こちらへ来なさい」

その声によつとこさ気が付いた優は歩みを止め、声の主の方へ向かって振り返る。

するとそこには1人のモデルのようなスタイルをした女生徒が立っていた。

流れるような金髪のゆるふわな内巻きの髪型に、キリツとした鋭い碧眼。ほわほわとした可愛い髪型とそのキリツとした顔付きのギャップはもの見事に“ギャップ萌え”というものを引き出していた。(その本人に自覚はないが)

「……………えっと、俺に何か用ですか？」

「俺……………？ まあいいわ。あなた新入生でしょう？」

全く何なのかしらこの子。私が声を掛けても直ぐに気付いてなかったみたいだし、それに自分の事を『俺』って呼んでいたわね。ちよぴり変わった子なのかしら？

知らぬ間に彼女の中で、変わり者のレッテルを貼られていた優であった。

「は、はい。そうですけど……………」

「そう。ならついでいらっしやい」

そう言つと彼女は優に背を向け歩き始めてしまった。そのモデルウォーキングのような“可憐”な歩き方に見蕩れる優。

「ほら。何をしているの？ 早く来なさい」

「あつ！ は、はい！」

そんな背中をそそくさと追い掛けて行く優であった。

時を同じくして天雲学園理事長室

「ふむ……。聡の所の優君か。早く会いたいなー！ こんなちつさな時なんて一緒にキャッチボールとかして遊んだし、今じゃそんな優も高校生かー。さぞイケメンになっちゃってるのかな？」

部屋の広さは40畳程はあろうかという、大きな部屋の主『アマク天雲モキヨウ京』は立派な椅子に座つたり、立つたりと、ソワソワと落ち着かない様子であった。普段の彼を知っている者が見たら、きつと目を疑うことであろう。

「あつ！ そうだそうだ！」

何かを思い出したかのように椅子から立ち上がり、『理事長』と書かれたプレートの置かれた机に向かつて歩き出す。

その机の上に置かれているのは古ぼけた写真と2通の封筒だった。その手紙の差出人は優の父、聡だった。

1通の封筒は既に開封されていた。その中身は古ぼけた写真だった。

古ぼけた写真には仲良さそうに手を繋いだ少年と少女が写っていた。

「もうあの約束をしてから10年か……」

その写真の裏にはこのような文が書かれていた。

『 10年後、優と美結を許嫁として再開させる 』

それは聡と京が交わした1つの約束を記した物だった。

「今日は記念すべき日となるだろう！ ハッハッハ！」

そう呟きながらもう1枚の未開封の封筒へと手を伸ばす。

こちらの封筒も差出人は聡だが、この封筒は今朝五時前に、聡、本人が直接、天雲邸へと持ってきた物だった。その為、聡から手紙を受け取っていたのは天雲家の使用人であり、京は先程使用人からこの手紙を受け取っていた。

封を開け、手紙を読み進める京。その手紙には……このような事が書かれていた。

「京久しぶり！ そしてすまん！ 約束守れなくなっちゃった。てへっ！ 優に無許可で試験薬の実験したら失敗しちゃって優くん女の子になっちゃったわー。それと優に伝えて欲しい事があるんだ。その試験薬の事と優におきた変化は一切口外してはならないって。実はまだその試験薬の存在は秘密なんだ。だってこれから先、まだ

優にどんな変化が起こるか、僕にもわかんないんだよねーははは！
死んだりほしくないから安心していいよー。あ！ 後、京もこれ秘
密にしてね？ 美結ちゃんと明日香さんには言っていていいけど、それ
以上はダメ、絶対。それじゃー僕とマミーは解決方法探すために外
国行ってくるね！ 優と凜よろしく頼むね。それじゃあばいびー！」
口をワナワナさせながら、微動だにしない京。その目尻には涙が
溜まっているように見える。

「あの馬鹿！ うちの娘の婿になんつーことしてくれてんだあああ
ああ！」

その京の叫び声は校舎中に響き、後に『理事長ご乱心事件』
と呼ばれたとか呼ばれなかったとか。

所変わって

この人、俺のことどこまで連れていくんだ？

優は金髪の女生徒の後に付いて歩いてきた。そして歩いていて気
付いたことがあった。それは会う生徒、会う生徒が口々に金髪の女
生徒へ向かって

「おはようございます芹副会長」

「おはようございます芹さん」

「副会長おはようございます」

「おはよー芹さん。お仕事頑張つてね！」

「うおー！ 芹様！ 今日も相変わらずお綺麗ですね！ 付き合つて下さい」

「おいそのクズ！ 抜け駆けは許さねえぞ！ 芹さん！ 俺と付き合いますよー！」

と言った具合で、そこかしこから声が掛けられていた。

その声に金髪の女性徒は1っ1っ丁寧（？）……

「おはようございます」

「おはようございます。ありがとうございます。頑張りますよ」

「おはようございます。腐れ死んだらどうかしら？」

と、返事していた。

どうやら金髪の女性徒は学園の副会長のようだった。

そんな事を考えながらうつむきつつ、歩いていた優は前を歩いていた副会長が止まったことに気付かず、ぶつかってしまった。

“ポニユ” という音が聞こえそうなくらい柔らかい何かに優の顔が埋もれていた。

副会長は目的の場所に着いた為、歩みを止め、後ろへと振り返つたその瞬間、優がうつむきながら歩いて来ていた。優はそのまま副会長の“豊かな胸”へとぶつかっていた。

「……何をしているのかしらあなた」

「え？ ……ってうわあ！ ご、ごめんなさい！ ちょっと考え事してたら……」

「……まあいいです。ではこちらで受付を行つて下さい。

それ

と、申し遅れました。私は天雲学園、学生統率自治会副会長、芹・セリ・ア・シユラ・カレン・可憐と申します。これからも同じ一年生としてよろしくお願

します。」

「あ、俺は宮永 優っていいます。……って同じ一年生!？」

「ええ。そうですね？ 何か腑に落ちない点でも？」

あら。また俺って言ってるわねこの子。男の子みたいで面白いわ……ふふつ。

そんな彼女 可憐の中で今度は面白い子扱いされる優であった。

「い、いえ！ あの……芹さんも一年生なんですよ？ 今日入学式なのに、えーつと学生統率自治会でしたっけ？ その副会長なんですか？ なんかおかしい気がするんですけど？」

「それは後々にご説明致しますので、先に受付をして下さいませんか？ 時間も差し迫っていますので」

なんかこの人の喋り方怖い……。心の中でそんなことを思いつつ、自分が連れてこられた場所が何処なのか確認しようと、辺りを見回す。

するとどうやら事務室の受付に連れてこられたようだった。

「あ、はい分かりました」

そんなやり取りをしていると、受付の奥の方から事務員さんが名簿を持ってやって来た。

「こちらに名前の記入をして下さい」

「はい」

名前の記入を済ませ、事務員さんから入学式の説明を受ける優。

「入学式は九時三十分から始まりますので、九時二十分迄には講堂

へとお入り下さい。後の細かい流れはこちらのプログラムで確認して下さい」

「分かりました、ありがとうございます」

無事受付を済ませた優は、横に立つ可憐へと話掛ける。

「それでさっきの話なんだけど……」

「あら、宮永さん。私にここまで連れてきてもらってありがとうございますの一言もないんですか？ 私落ち込んだじゃいますよ？ いいえ、やっぱり怒りますよ？」

「……ありがとうございます、ごめんなさい」

駄目だ。俺、この人苦手だし怖い。それに絶対DSだ。……

そんなことを思った優に対して。

面白いわねこの子。こんな可愛い見た目なのに、喋り方はまるで男の子。それにイジっていて楽しいわ。これからも事あるごとに、いちやもんを付けるしかないわね。……と言う感じで可憐はその後、優のことをイジろうと決めていた。否、ストレス発散の的にしようとして決まっていた。

「あのーそれで教えてもらってもいいかな？」

「そうね……。教えてあげたいのは山々なのだけれど、もう9時15分よ。講堂へ向かいますよ。その後にゆっくりと丁寧に教えて差し上げますよ」

その一言を残し、可憐は歩いて行ってしまふ。

優はそんな背中を納得いかないような表情で付いて行くのだった。

そしてその優の背後に、優が自宅を出てから、ずっと付いてくる人影があることに、優は未だに気付かないでいた……。

第二話『ば……ばばばば』(前書き)

この物語はフィクションです。

実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけたら、報告していただくとありがたいです。

第二話『は……ちひちひちひ』

講堂へと移動中

……芹さんって絶対俺のこと嫌いだよな……。

優がそんなことを思いながら、可憐の後について歩いていると……。

『ピンポンパンポン。高等部一年生の宮永 優さん。いらっしやいましたら、二階、理事長室までお越しく下さい。 繰り返します……』

「あれ？ 今呼ばれたの俺か？」

立ち止まって独り言の様に呟いたところで……。

「あら。宮永さん。入学式早々に何か大変なことでも起こしたの？ 理事長からの呼び出しなんて滅多に聞いたことがありませんね。それも入学式がもう始まるという、こんな時間に……」

「そ、そんなことしてませんって！ けど参ったなー。あんなに頑張って、遅刻しないように急いで来たのに、これじゃあ結局、入学式遅刻するじゃん……。はあ……」

「まあ、理事長からの呼び出しならば遅刻も許されるでしょう？」「それは……そうかもしれないけど……なんか納得いかないなー」「そんな不満そうにしないの。もしかしたらいいことかもしれないでしょう？ 何事もポジティブに考えたらどうかしら？ 理事長室の場所は分かるの？」

「そうだね！ 前向きに行くよ！ 理事長室はわからないや……」「理事長室はちょうどこの上のフロアよ。 その階段から上がった

ておいきなさい」

「うん。わかった。それじゃあ、また後でね！」

……優が階段へと向かおうとしたその背中に、声がかかる。

「あら。宮永さんつてもしかしてとてつもなく、お馬鹿さんなのかしら？ 理事長室の場所教えてあげたのに、またもやお礼の一言もないの？ 私とっても傷付きました。もうこれから宮永さんのこと、徹底的にイジります。それではさようなら」

可憐は一気に捲し立て、最後に“黒い笑み”を浮かべ、優に背を向け、スタスタと歩いていってしまふ。

「う……なんかお腹いたくなってきた。あの人怖すぎるよ……」

お礼を言わない優が悪いのだが……。

「はぁー……早く理事長室いかなきゃ」

言葉とは裏腹にトボトボと歩いていく優であった……。

理事長室

俺なんか京おじさんにしたかな……？

そんなことを考えながら、理事長室と書かれた扉を“コンコン”とノックする。

「京おじさん？ 優です」

少し間が空いて、扉の向こう側から声が返ってきた。

「ゆ、優か。はいつてくりえ……ゴホン……入ってくれ」と、声が返ってきた。

どうしたんだろう京おじさん？ なんか緊張してるのかな？ 久しぶりに会うからとか？ ……いやいや、あの京おじさんに限ってそんなことないよな！。うちのダメ親父と違って、冷静だし、“滅多な事”じゃ驚かないし。

優は学園に着いてからというもの、遅刻せずに済んだ安堵から、自分が女の子になってしまったことを完全に忘れていた……。

「失礼します」

ドアを開き、室内へと入る。

深々と丁寧にお辞儀をしてから京へと声を掛ける。 お辞儀をした際、優は長くストレートに伸びた黒髪が、邪魔になり“無意識”に片耳に掛けた。 ……その姿はまさに大和撫子と言われても違和感は無かっただろう。

「京おじさん。 お久しぶりです」

「……」

だが京は何も喋らない。

「えーっと……あの……京おじさん？」

優は不安になり、京へと再度声を掛ける。

その時の優は不安からか、自然と少しうつむき、前のめりになりながら、ウルウルとした上目遣いで京を見ていた。

そんな優の様子を見た京は。

「ば……ばばばば」

ばばばばと言いながら固まって、号泣していた。

なんてことだ！ 本当に女の子になってしまっている……。それもこんなに美しくなつて。

全くあの馬鹿野郎は自分の息子になつてこととしてやがるんだ……。美結との許嫁のこと、どうすりゃいいんだ……。ったく。取り敢えず、今は黙つておくしかないか。

つと、京が心の中で様々な思いに、葛藤しているのを見た優は、そんなことは露知らず、京に何かあつたのかと思ひ、小走りで近づき、右腕へと抱き付いた。

そこで忘れていたことを思い出す。自分に胸が有ることに……。自分が女の子になつてしまったことに……。

「……んっ……」

今の体勢は優が京の右腕に胸を押し当てている格好になつていた。そして優は今、『ノーブラ』状態であり、胸の“敏感な部分”が擦れ、妖艶な吐息を漏らしていた。

なんとも言い難い難い空気が流れ、優も京も一時停止状態に……。そんな時、ノックも無く、いきなり理事長室の扉が開く。

「京さん。もう入学式で……」

そして今度は空気が凍る。

そんな中、扉を開けた女性が“カツカツ”と苛立ちを表したような靴音で優と京に歩み寄って来る。

優と京は未だに動けず、そのままの状態で固まっていた。

「……京さん？ 人がわざわざ呼びに来てあげたのに……まさか、うちの学園の生徒に手を出していたなんて……。それもこんなに可愛い子に……。私という者がありながら浮気するなんて、どうやら京さんは死にたいんですね？」

「ち、ちがうんだ明日香！ 話を聞いてくれ！」

「この期に及んで言い訳？ そんなの聞きたくありません！ うつぶ。……私の乗馬用の鞭はどこでしたっけ？ ……あっ！ ありました！ ありましたよっ京さん」

明日香が乗馬用の鞭を見付けて、ニコニコと目の笑っていない笑みを浮かべながら、京へと向かってゆつくりと歩いていく。

そんな剣呑な雰囲気の中、やっと我に返った優は慌てて、京の右腕から離れた。そして、剣呑な雰囲気を発している女性へと話し掛ける。

「明日香おばさん、お久しぶりです。宮永 優です」

「……はい？」

何言っているのかしらこの子？ といった訝しげな視線を向けられて焦る優。そこで京が事態の収集を行う為に、素早く動く（恐怖心から素早く動いているのは言うまでもないだろう）。

「明日香。信じられないだろうが、彼……いや、彼女は本当に聡のところの優なんだ。」

「ええ。信じられません。言い訳をするならもう少し上手いことい
いなさい。……覚悟は出来ているのよね？」

「ちよ、ちよっと先にこれを読んでくれ！ 今朝、聡から届いた手
紙なんだ！」

その京の必死な形相に、流石に何か訳があると思つた彼女アマ天雲
クモアスカ明日香

『明日香』（京の妻）は手紙を受け取り読み始める。

しばらくして、手紙から顔を上げ、優へと向かつて歩いて行き…
…。優のことを抱き締める。

「大変だったでしょう？ ごめんねおばさん、信じられなくて」
「く、くうふしひです！」

「これから何か困つたことがあつたら何でもいつてくるのよ」

「明日香、優が死にそうになっているよ」

「あら！ ごめんね大丈夫？」

「……は……は、い……だいじょ……うぶです」

「もう！ こんな可愛くなっちゃって！」

「ありがとうございます？」

「で、優君に話があるんだけど、いいかな明日香？」

「ええ。どうぞ」

「では優、先ずはこの聡から受け取つた手紙を君にも読んで貰いた
い……」

先程の雰囲気とは打って変わり、その真面目な京の表情に、優も
気を引き締める。

「はい」

手紙を受け取り、読み始める優。その手紙に書かれていたことは
今朝読んだメモの内容と所々、重複していた。『約束』とか時々意

味のわからないことが出てきていたが、手紙を読み終える。

そして、メモに書かれていなかった内容に気付く。……どうやらこの試験薬のことに関する全てのことは口外してはならないらしい。

「試験薬のことは秘密にしるってことですよね？」

「ああ……。どうやらそうみたいだ」

「正直、難しいですね……」

「まあ私達は口外しなければ問題は無いが、優の場合は当事者だからな……」

「俺のこと知っている人がいたらどうすればいいんですかね？」

「そうだな……。そこはなんとか優にごまかしてもらうしかないな……」

「あ……あはははは。凄い無茶苦茶言いますね」

そんな無茶に思わず苦笑いする優。

「仕方ないだろう」

「まあ、出来るだけやってみますよ」

「私達も全力で優をサポートするから、何かあったら遠慮せずに言ってくれて構わないからな」

「はい！ その時はお願いします！」

「ああ！ 任せてくれ。それともう1つ私からお願いがあるんだが……入学式まで、もう時間がないから、歩きながら構わないか？」

京は壁掛け時計を見ながら優へと尋ねる。

「そうですね。もう時間もないですし」

そういいながら歩き始める3人。時刻は既に九時二十六分と、遅刻は確定しており、心の中で肩を落とす優であった。

再び講堂へと移動中

「それで話というのはこれから入学式で行われる、新入生の代表として、壇上でスピーチを行って貰いたいんだ」

「はいっ！？ どうして俺なんですか？」

いきなりの申し出に、声が裏返ってしまう優だった。

「優も知つての通りだが、この学園は幼稚園からある為に、殆どの生徒はそのままエスカレーター方式で進学していく。故に外部から途中受験してくる者を定員数の関係で全くと言っていい程、受け入れていないのが現状だ。今のうちの生徒達は他校の生徒と比べると、極端に限られた、既に出来上がった人間関係でしか、人付き合いと言うものをしていないんだ。それを少しでも変えるには高等部からうちの生徒になる優に、サプライズで新入生代表としてスピーチをしてもらうのが最善だと思っただけだ」

「それは何となくわかりますけど……俺一人、入っただけで何も変わる気はしないんですが？」

「私もそこまでの変化は期待していない。ただ、少しでも現状を崩せるなら、と思っただけだ。」

「わかりました。そんな大役、俺に出来るかわかりませんが、やりますよ」

そんな京の心配を聞いた優は、これから先、色々と迷惑を掛けるのは（全て優の両親のせいだが）目に見えている事だったので、少

しでも自分が役に立てればと思い、了承したのだった。

「そうか。すまないな優。それでスピーチの内容だが、こちらで既に原稿を用意しているの、ぶつつけ本番で読んでもらうことになる。……これがその原稿だ」

そういつて京が懐から原稿を取り出し、優へと手渡す。

原稿を受け取った優は、サラッと原稿を流し読みして、内容を確認した。

「了解です。スピーチの時の順序って、俺の名前が呼ばれて、俺がそれに返事して、そのまま壇上に登って、この原稿の通りスピーチをすればいいんですね？」

「ああ。それで問題無い。では頼んだぞ」

「はい。これから京おじさんには迷惑を掛けると思うので、これくらい朝飯前ですよ」

その言葉とは裏腹に、ガチガチに緊張している優だった。

緊張のあまり、いつの間にか講堂の入口に着いていたことに気づいていなかった優。

「では、いくぞ優」

「……はい」

京が講堂の大きな扉を開け、理事長夫妻と遅れて入学式に登場する事となった優。

講堂内にいた、全ての生徒の視線は、入学式の最中にいきなり開かれた扉へと向けられる。

うわっ！ 皆コツチ見てるよな多分……。滅茶苦茶緊張してきた……。駄目だ、ここで緊張なんてしてられないな。よしっ。気合い入れていっちょやってやりますか！

優は両頬を軽く“ペシッ”と叩き、それまでの緊張が嘘のように、優雅に講堂へと理事長夫妻に少し遅れて、入場していくのであった。

そして誰も見たこともない、大和撫子のような美少女の、いきなりの登場に、全員の視線が釘付けとなったのは、言うまでも無いことだろう……。

第三話『ムネアル』（前書き）

この物語はフィクションです。

実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけましたら、報告していただくとありがたいです。

第三話『ムネアル』

講堂

講堂内へと一步入った所で、優は立ち止まり、皆の視線が集まる中、両手を下腹部辺りで軽く握り、深々と優雅に、お辞儀をする。そんな優の姿は皆の目には淑女の様に映ったことだろう。

皆、何が起きているのかわからないといった表情で、突然入ってきた美少女を凝視する。

そして優はたっぷり五秒程してから、ゆっくりと頭を上げ、喋り始める。

「このような大切な式に遅れてしまい、誠に申し訳ありませんでした。」

と言った後、もう一度先程と同じように深々とお辞儀をする。そして皆が呆然と動けぬ中、優に向かって歩いていく人影があった。その人影はこの美少女のことを知っていた。優が頭を上げるとそこには毎日見ている顔があった。

「新入生の宮永さんですね。こちらの席が新入生の席となっておりますので、こちらに着席下さい」

「は、はい」

少々引き攣った笑顔で優が返事をする。

そしてその笑顔を見た相手の女性は“ニヤツ”と、不気味な笑みをほんの一瞬だけ浮かべ、優にしか聞こえない小さな声で、『妹になった優君、めっちゃ可愛い！』と言った。

そう。この女性こそが、優の姉の『ミヤナガリン宮永凜』である。こ

の春から天雲学園で教鞭を執ることになっていた。

優は凜に促された席へと向かい、着席した。

そして凜も、教員用の席へと戻っていった。

2人が着席した瞬間、今まで水を打ったように静まり返っていた講堂内が、俄にざわめく。

そのざわめきの発生源は生徒達のひそひそ話であった。

「おい、なんだあのスゲー美少女」

「ミヤナガって呼ばれてたよな？」

「ミヤナガ？ 聞いたことないなそんな子」

「ってかそもそも、うちの学園にあんな可愛い子いたっけ？」

「わかんない！ 初めてみた」

「凄い綺麗な人！ 私のお姉様になって欲しいな」

「うおー！ 俺はあの美少女を見るために今まで生きてたのか！

母ちゃん生んでくれてありがとう！」

「よし！ 俺明日告白しに行くってくるわ」

「俺も！」

と、いった具合で男女問わず、そこかしこでひそひそ話が行われていた。

姉貴のやつ、絶対後で『助けてあげたんだからちゅーして！』とか言ってくるんだろうな……。

優が席に座って心の中でそんなことを思い、小さく肩を竦めていたその時。

「皆さん静粛に！」

そんな声がスピーカーから聞こえてきた。その声は威厳に満ち溢れ、聞いているだけで自然と落ち着くような安心感のある、京の声だった。

その声を聞いた生徒達はひそひそ話を止め、壇上へと視線を向けた。

「まず初めに私から、皆様へ謝らなくてはならないことがあります。理事長である私が、いかなる理由であろうと遅刻をする等、あつてはならないことです。それと、そちらの宮永さんは私の用事を聞いてもらっていたが為に、遅れてしまったのです。宮永さんに責任はありません。全て私の責任です。誠に申し訳ありませんでした」

そういいながら京は深々と頭を下げ、謝罪した。皆、初めから遅刻してきた京や優を咎めるつもりもなく、ただただ優の美少女っぷりに騒いでいただけだったので、京が謝罪してくるのは予想外だったのだろう。その時には既に講堂内は元の、緊張感のある空気へと戻っていた。

流石京さん。私の旦那様は今日も格好良くて素敵です。

そんな盲目的な事を心の中で思う明日香であった。

その後入学式は何事もなかったかのように滞りなく進んだ。

優の出番

司会進行の教職員が次のプログラムを読み上げる。

「 続きまして、新入生代表による答辞です。 新入生代表の

宮永 優さん」

「はい」

「檀上へとお願ひします」

優の名前が呼ばれ、優が返事をして立ち上がった途端、生徒達が“ビクッ”と反応する。だが先程と同じようにざわめきは起こらなかった。

そんな中、優のフルネームを聞き、“数人の生徒”だけが、優のことを疑問を浮かべた表情で見っていた。

檀上へと登った優は、皆の視線が集まる中、全く緊張した様子も見せず、小さく微笑んでから答辞を読み始める。

「 答辞。新入生代表、宮永 優。 本日は私たち 」

そして優の答辞は特に何事も無く、無事に終了した。 だがそう思っていたのは優だけだった。

例年ならば、新入生代表となるのは成績最優秀者である、首席の生徒が行うことになっていた。けれど今回、その新入生代表に選ばれていたのは、いきなり現れた見たことのない美少女だった。その為、新入生に限らず、在校生の生徒にまで顔と名前を覚えられてしまった。このことは優にとっては致命的なダメージとなる。自分が女の子になってしまったことを隠さなくてはならない優にとって、目立つこと、相手の興味を惹くようなことは、素性を探られる大きな要因になるということである。

新入生代表がそんな生徒から選ばれているとは露も知らない優は、自分がルックスも相俟って、皆の興味の的になっていることに気付かないでいた。

ロビー

入学式が無事に終了し、講堂の外へと退場した優を待っていたのは大勢の生徒による質問攻めだった。優の周りにはあつと言つ間に人垣が幾重にも出来ていた。

「ねえ君。高等部からこの学園に来たの？」

「新入生代表つてことはミヤナガさんは学年主席なの？」

「ミヤナガさんつて芸能^{アイドル}特待生？」

「電話番号とメアド交換して！」

「一目惚れしました！俺と付き合つて下さい！」

「お前さつき明日告白するつて言つてたじゃねえーか！ 抜け駆けすんなよクス！」

一気に話しかけられ、何がなんだか分からず、優があたふたと答えられないでいると。

「皆さん！ 宮永さんが困っていますよ？ その辺にしてあげて下さいませんか？」

「……天雲会長！？」

「我らが女神の天雲会長だ……」

「神々しい程に美しい！」

「俺やつぱり天雲さんが好きだ！ 付き合つて下さい！」

「お前どんだけ浮気性なんだよ……」

そこに現れたのは優に勝るとも劣らない、茶髪でショートヘアの活発そうな美少女だった。

そして優は思わず呟く。

「みーちゃん！」

みーちゃんと呼ばれた生徒は顔を真っ赤にして、慌てた様に優の手を掴み、畳み掛けるように言う。

「み、宮永さん！ 理事長が呼んでいます！ 一緒に来てくれますね！？」

有無を言わせぬその雰囲気、コクコクと何度も頷く優。

そんな中周りにいた生徒達は口々に。

「みーちゃん？」

「今みーちゃんって言ったよな？」

「みーちゃんって……天雲会長のことか？」

「天雲さんとミヤナガさんってもしかして知り合い？」

「しかも天雲会長のことをみーちゃんって呼ぶくらいの中だと……？」

その生徒達の声が聞こえるより早く、優の手を掴んで走って逃げていく彼女であった。

理事長室前

走って逃げている時に、大勢の人に見られちゃったけど大丈夫だよね……？ そんなことを気にしながら、はあはあと息を切らせている彼女。

そんな彼女に、全く呼吸を乱していない優が尋ねる。

「どうしたのみーちゃん？ いきなり走り出すから、俺転びそうになっただけど……」

「はあはあ……ちよっと……待って」

そういいながら理事長室の扉をノックもせず、無造作に開ける彼女。そのまま理事長室へと何も言わずに入っていくってしまう。

優はポツンと取り残されたように棒立ちしていたが、やがて声が掛けられる。

「早く入ってよ優！」

「う、うん分かった。失礼します」

理事長室にはいると、彼女以外誰もいなかった。理事長に呼ばれたはずなのに、理事長が見当たらないので、彼女へと尋ねる優。

「ねえ、みーちゃん。京おじさんはどこ？」

「入学式の後なんだから挨拶回りとか、してるに決まってるでしょう！ それに別にお父さんが呼んだなんて嘘だから！ それとその『みーちゃん』って呼ぶの、恥ずかしいからやめなさいよ！」

そんなことを全く悪びれた様子もなく言う彼女。　彼女は「天雲美結」。優の幼馴染で、天雲家の長女である。優が昔この学園に通っていた頃から、宮永家と天雲家は家族ぐるみで仲が良かった為、優と美結が仲良くなるのは当然だった。幼い頃はほぼ毎日と言っていい程に、二人で一緒に遊んだりしていた。そんな美結を十年振りに見た優は思わず、幼い頃のあだ名で呼んでしまっていた。

「嘘って……。じゃあなんで俺のこと呼んだの？」

「優ってば！　それが久し振りに会った幼馴染に掛ける言葉！？」

「えっ！？　じゃ、じゃあ久し振り！　みーちゃん」

「だ・か・ら……。『みーちゃん』って呼ぶなー！　ばかばか！　優のばか！　私がどれだけ寂しくて、心配したか分かっているの！？」

もの凄い剣幕で涙目になりながら、喚く美結に優は。

「…………ごめん。みー、美結。俺が悪かった」

取り敢えず謝っていた。

「…………ん…………分かればいいのよ全く。これだから優は…………」

「えっ？　ごめん最後の方聞き取れなかった。何？」

「なんでもないわよ！　いちいちうるさい！　それより優のその格好はなんなのよ！？　声も女の子みたいな声してるし！　髪だってサラサラなロングヘアーだし！　なんか馬鹿デカい偽乳付けてるし！　今更だけどあんた本当に優なの？　それとも、まさか、優ってそんな趣味が有ったの！？」

どうやら美結は優が女の子になってしまったことをまだ、知らないようだった。

優がどうやって説明しようかと悩んでいたその時　美結がいき

なり優の両胸を乱暴に“ギュツ”と鷺掴みにした。

「……いつ、痛いよ美結う……」

「……なっ!？」

美結が茫然と立ち尽くす。だが手だけは優の胸を鷺掴みにして、離してはいなかった。

「チョットユウコレドワイウコト？」

驚きのあまり、片言で喋り始める美結。

「ユウニムネアル、ユウニ、ムネアル、ユウニ、ムネア……あ、あああ、あんた！ ムネアルだったのね!？」

「誰っ!？ ムネアルって誰っ!？ 美結シツカリして！ 現実に戻ってきて!」

そんな、どこかにトリップしてしまった美結を、現実に帰ってこさせようと、美結の肩を揺さぶる優。その行いもあってか、無事(？)現実へと帰還した美結であった。

「……はっ！ あたし今何してた？」

「なんか ってべ、別に何もなかったよ？」

「そう？ ならいいのよ。今なんだか夢を見てたみたいだったから」

「そ、そうなんだ……。どんな夢みたの？」

「なんか私がこうやって優の胸を鷺掴みにして って!」

再度、優の胸を鷺掴みにして固まる美結。今度はどこにもトリップしないようだった。

「だから、そんなに乱暴に掴まれたら痛いって！ 離してよ美結う……」

そんな美結に涙目になりながら、離してほしいと懇願する優。会話を聞かなければそれは、傍から見たら美少女同士が馴れ合っているようにしか見えなかった……。

「ちょ、ちょっと待って優！ なんであんた胸ついてるのよ!？」

そんな美結の問いに。

「俺、女の子になっちゃったんだ」

っと、サラリと答える優であった……。

第四話『アーツ!』（前書き）

この物語はフィクションです。

実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけたら、報告していただくとありがたいです。

第四話『アーツ!』

理事長室

「なに馬鹿言ってるのよ優! いくらなんでも有り得ないでしょう?」

美結は意外と落ち着いていた。

きつとこれは久し振りに再開する私をビックリさせようと、何か企んでいるのだ。

と、その程度に思っているだけだったからだ。

「いやあ……。俺もそう思いたいんだけど……マジなんだよねーこれが……」

「はいはい。もう冗談いいから! この偽乳はどうなってるのよ? ちょっと見せなさいよ!」

そついいながら優の制服を強引に剥ぎ取ろうとする美結。

「ちよ、ちよつとやめろつて! 美結、今の俺の裸なんてみたら、またさつきみたいにとリップするぞ!」

そんな美結を宥めながら、防御に徹する優。二人がそんなことをしているその時、不意に理事長室の扉が開く。

「……な、何をしているんだ美結」

「お、お父様……。それはその……優が自分は女の子になった、だなんて変なことを仰るので、この目で確かめようとしていただけです」

部屋の主である京が明日香と共に帰ってきたのだった。
ここから美結の猫被りが始まる。

「美結。先ず、優を離しなさい。……お前もショックかもしれないが、優は本当に女の子になってしまったんだ」

「そ、そんな。いくらお父様であっても、言っつていい冗談と悪い冗談があると思います。いつも怒らない美結でも怒る時は怒りますよ！」

まだ猫被りしてるのかよ……。昔と変わらないな美結は。京
おじさんにバシてないとも思ってるのかな？

優が心の中でそんなことを思いながら、京と美結のやりとりを見
守る。

美結は幼い頃から、優以外の人間には猫被りをしている。初めて
優と会った時は優に対しても、猫被りをしていたが、優が『どうし
てみーちゃんはそんなに気持ち悪い喋り方するの？』と聞いて以来、
優にはズケズケと物を言う様になった。美結本人はまだ、優以外に
は猫被りがバシていないと、思っているようだが、両親にはバレバ
レであった。気を使って美結に言っつてないだけで、困った親馬鹿で
ある。

「そう思いたい気持ちも分かるが、一先ず、聡が持っつてきたこの手
紙を読んてみなさい」

「優のお父様が持っつていらっつしゃった手紙ですか？ 分かりました」

そう言っつて京から手渡された、優の真実が書かれてる手紙を受
け取る美結。

一度“わざとらしく”深呼吸をして、手紙を開いて読み始める。

そして読んでいる最中には何を考えているのかわからない、ポーカ
ーフェイスで時折、目を潜めるだけであった。読み終わって美結が
顔を上げると、これまた“わざとらしく”心配した表情を浮かべた。

「お父様、これは大変なことになりましたね！」

時々、笑いをこらえられないように、口元に手をやりながら喋る
美結。

うわー。美結のやつ、絶対面白がってやがる。笑いそうにな
ってるのがバレバレだっつーの！全く、本当に変わってないな。人
をオモチャにする所といい。

そんな感じで優が心の中で悪態をついていると　それを感じ取
ったように美結が優へと振り向く。

振り向いた美結は京に、自分の顔が見えない角度であることをい
いことに、無言で爆笑するという離れ業を優に見せ付けるのであ
った。

「優……同じ女の子として……何か困ったことがあったら言ってね
？　私が面倒見てあげるから……ぷっ」

「お、お手柔らかにお願いします美結さん」

美結が所々言葉に詰っているのは、優を心配している訳ではなく、
ただ単に笑いを堪えているだけだった。その証拠に喋り終えた後、
噴き出しているのを見ていただければわかるだろう。

「それと優……あんた今下着付けてないでしょう？」

「下着？　馬鹿だな美結！　いくらなんでも“ノーパン”な訳ない
じゃん！　ちゃんと穿いてるよ！」

ふと思い出したかのように、美結が優にしか聞こえないように顔を寄せ、そんなことを言う。

「あんだねえ〜！ 下もそうだけど！ 上はどうしてんのよ！ さつき掴んだ時に下着付けてるように感じなかったんだけど、まさか“ノーブラ”！？」

「えっ？ そうだよ？ 俺が女物の下着なんか持つてる訳ないじゃん！」

「持ってたなら私があんたのこと殺してあげてたわよ全く！ ってそうじゃなくて、凜さんに借りたりできたでしょう？」

「いやー。それが今日寝坊しちゃって……朝起きたらもう姉貴いなかったんだよねー。それに、いたとしても借りたくなってるじゃないよ！ なにが悲しくて姉貴の下着着けなくちゃならないんだ！ 俺はそんな変態になんてなりたくない！」

「はあ〜。 “ノーブラ”で学園に来てる、変態露出狂がそんなこと言ってもね」

優の言い分に、腰に手を当てていかにも呆れたという表情で溜息をつく美結。

そんな美結がいきなり優の腕を掴んで……。

「ちよ、ちよっと美結！ いきなり引つ張らないでよ」

そんな優の言葉を無視して、美結は京に向かって……。

「お父様！ 少し応接間をお借りします。絶対に入ってこないで下さいね！ もし入ってきたら、如何にお父様であっても、美結は一生許しませんから！」

「あ、ああ。わかったよ美結。お父さん、美結に嫌われちゃたら生きていけないから、ちゃんと守るよ！ この命に代えてでも！」

「流石は京さんです！ 凛々しくて素敵です！」
「では！ 入ってきたらダメですからね！」

美結が理事長室の隣にある応接間の扉を開けて、優を中へと押し込み、扉を閉める。

そしてその直後、優の悲鳴が轟く。

「やめてー！ 美結やめてくれー！ 脱がさないで！ あっ！ ちよ、ちよつとそんなとこ触らないで！ あ、あ、あ、アーッ！」
「うっさい！ あんたそれでも男なの！？」

「う、うう……。今はもう女の子だもん……。もうこれじゃ、お嫁にいけないよ……。」

「呆れた……。あんた本当に“ノーブラ”なのね……。って私より胸大きいのム力つくんだだけど！？」

「そんなこと俺に言われたって知らないよ！」

「優のくせに生意気言うなー！ こうしてやるー！」

「滅茶苦茶言わないでよ……。っていたっ！ いたたたた！ 痛いからそんなとこ引つ張らないでよ！」

「あんたが悪いのよあんたが！ それで下はどうしてるのよ！」

「だ、ダメ！ 下は絶対見ないで！ やだやだやだ！ 美結の鬼！ 鬼畜！」

「ああん！？ 言ってくれるじゃないたかが、優の分際で！ もう絶対に許さない！ 一生許さない！ 大人しく脱がされるや！ われコラア！」

「ヒイツ！ 美結が切れた！ やめて！ スカート脱がさないでっ て……。アーッ！」

「あ、ああ、あんた！ なんで男物の下着穿いてるのよ！？ ヘンタイッ！ 死ね！」

「そんなこと言われたって……。 “ノーパン”よりはマシかと思って

……」

「喋んな変態！ あんたそんなんで明日から始まる、身体測定と体力測定どうするつもりだったのよ!?」

「あっ……忘れてた……色々ありすぎてそこまで頭回ってなかったわー。あはは」

「あはは……じゃないわよタコ！ なに呑気なこと言ってるのよ全く。はあー。なんか気にしてあげた、こっちがバカバカしくなってきたわ」

「いやーごもつともです美結さん。すみませんでした」

「分かればいいのよ、わ・か・れ・ば！」

「は、はい。そんな睨まないですよ。ワニみたいな目付きになってるよ?」

「あなたは一言多いのよ！ うりゃあ！」

「ほげっ！ ボ……ボディ、ブローは……勘弁し、て」

「まあいいわ。このくらいで許してあげる。ほらささっさと服着て立ちなさい！」

「う、うう。わかったよ……」

「優！ あんた今私にされたこと、お母さんとお父さんの前でなんか言ったら、ぶっ殺すからね！」

「わ、わかってるよ！ 絶対に言わないから！ 殺さないで！」

「ほら、じゃあ戻るわよ」

こうして応接間から何食わぬ顔で出てきた美結と、一気に老け込んだ顔で、お腹を押さえながら出てくる優であった。

そして美結は知らなかった。今の悲鳴にも似た会話が全て、理事長室に筒抜けであったことに。

時を同じくしてロビー

「あれー？ あいつ何処行ったんだ？ あれだけ目立ってたんだから、すぐに見付けられそうなんだけどなー？」

そんなことを呟く人影が、そこにはあつた。

今朝あいつの家にサプライズで一緒に登校してやろうと思つて、驚かす準備して道路脇に隠れて迎えに行つてやったのに……。玄関から出てきたのは制服着た、美少女だったし……。誰なんだあの子？ 表札が『宮永』ってなってるの確認したんだけどなー？ それに芹副会長にも『宮永 優』って自分のこと言つてたよな？ 極め付けは凜さんにも『宮永』って呼ばれてたし、答辞の時に名前呼ばれて『宮永 優』で返事してたしなあ？ 何がどうなつてんだ？

その人影はそんなことを思いながら、優の姿を探すのであつた。

理事長室

「と言つ訳で、お父様、お小遣い下さい」

「そ、そんな悪いですよ。京おじさんにこれ以上迷惑掛けられないですって」

いきなりカツアゲをする美結。　あ、いや嘘ですよ？

優の下着やら服を学校が終わってから買いに行きたいのでお小遣いを下さいと、美結が京にお願いしているだけです。美結さん、神の視点にも殴りかかるのやめて下さい。お願いします。

「気にするな。優もそのままって訳にはいかないしな。それに優の面倒を見るのも私の役目だ。な〜に、可愛い娘が一人増えたようなものだ。私は嬉しいぞ！」

「お父様。優に何かしたら……わかっていらっしやいますよね？」
「わ、わかつている。ほらお小遣いだ。これで必要な物を全て買ってくださいなさい」

そうやって京が差し出したのは一枚のカードだった。そのカードを当然と言わんばかりに受け取る美結。そしてその光景をみた優が驚愕したようにツツコミを入れる。

「ちょ、ちよつとそのカードって“ブラックカード”じゃん！」

ブラックカードとは、皆さんもご存じのことだろう。ゴールドカード、プラチナカードのさらに上。最上位のクレジットカードであり、キャッシング限度額無しで、無制限に使える。世界でも限られたVIPにしか持つことを許されていない、真の大金持ちの証のカードである。そんな、普通に生活していたら一生見ることもないカードを“ポイント”といった感じで出されたら、皆、優のようにツツコミたくなるだろう。

そして、そんな優のツツコミを『何当たり前のこと言ってるのよこいつ？』というような表情で。

「そうだけど？」

と、返す美結であった。

そんなやり取りをしていると……。

『ピンポンパンポン。これからHRホームルームを始めます。新入生は自分のクラスの教室に集まって下さい。繰り返します……』

そんな校内放送が聞こえてきた。

そこで優はあることに気が付く。

「あれっ？ 俺、自分がどこのクラスか知らないんだけど？」

「優は私と同じクラスよ」

「そうなんだー」

「ロビーの前の掲示板にクラス割りが貼り出されていたでしょう？
見ていなかったの？」

「遅刻ギリギリで来たから、見る暇なかったんだよ。それより俺と
美結同じクラスなんだ！ 良かった」

「それはお父様が勝手にやったことよ」

「うむ。理事長の力で美結と優と一緒にしたのは何を隠そう、この
私だ！」

「それって……職権乱用じゃないんですか？」

「細かいことはきにするな優。社会とはそういうものだ！」

「あ、あはははは」

「ほら優。教室へ行きましょう？」

「……うん」

「あっ！ それと優。他の人がいる時は自分のことは『俺』じゃなく
って『私』って呼ぶのよ？ いい？」

「そうだなー。バレたらマズイんだし、なるべく頑張るよ」

そんなこんなで教室へと向かう一人であった。

第五話 『無駄にカツケエ!』 (前書き)

この物語はフィクションです。

実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけたら、報告していただくとありがたいです。

第五話『無駄にカツケエ!』

一年四組の教室

優の所属することになったクラスは一年四組。

各組、三十人で一組となっていて、クラスは八組までであった。単純計算で一学年につき、二百四十人の生徒がいることになる。これに二年生と三年生の生徒を足すと、高等部だけで七百人を越える数の生徒がいる。

そんなマンモス校である為、“普段”ならばどんな噂話であろうと、一週間はたたないと全校生徒の知るところとはならない。それも全校生徒が興味を持つ程の噂話なんて、“稀”にしかないので、殆どの生徒は聞いても二、三日たったら、忘れてしまうのが当たり前だった。

そして今回の、入学式に理事長夫妻と一緒に、それも遅れて現れた美少女の噂話は、どうやら“稀”な方の噂話の部類となったようだった……。

「お〜い！ お主ら、クラス割り見たでござるか!？」

「ロビーに貼られてたやつのことか？」

「ああ！ それでござる!」

そんな調子で一人のメガネを掛けた男子生徒が、隣にいた男子生徒数人のグループへと、興奮した様子で話し掛ける。

話し掛けられた男子生徒の方は『何、当たり前なこと聞いてんだコイツは？ しかも喋り方キメエ!』といった感じで、流しながら聞いていた。

「それがどうしたんだよ？ 俺は今、あの美少女のことしか頭に無

いんだよ」

「そういや、あの子、マジで可愛かったな！」

「わかるわかる！ それに新入生代表だろ？」

「才色兼備ってやつだな。天雲さんといい、芹さんといい、才色兼備ってそんなにホイホイいるもんじゃないと思うんだけどな」

「俺この学年に生まれてこれで良かったわ！ 同級生ってだけでも幸せ過ぎるぜ！」

「あ！ そういえば、あの答辞の前に微笑んでたの、どう見ても俺に向かつて微笑んでただけど」

「……ないない！」「……」

「お前モテないからって、悲しい妄想すんなよ」

「うるせえ！ そんなん分かってるつーの！」

そんなこんなで、話が今話題の、いきなり現れた美少女へとシフトした瞬間、一気に会話がヒートアップする男子生徒達のグループだった。そして周りを見渡すと、教室内にいるクラスメイトの大半が、似たような会話でグループごとに盛り上がっていた。

だがそんな喧騒の中、神妙な面持ちをしている生徒が一人いた。

その生徒は一人静かに考え事をしていた。

あれは、本当に優なのか？ だとしたらなんで……。

そんなことを延々と考え続けている生徒だった。

「クツクツク！ 拙者、その噂の美少女のことで一つ、分かったことがあるでござる！」

「なっ……！！ マジかよ！ あの美少女のことなんか分かったのか！？」

先程までのテンションが更に加熱され、興奮したように話し掛けてきた男子生徒へと聞き返す。

「ああ……。いいか、落ち着いて聞くのでござる。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「もったいぶつてないで、さっさと見えよ！」

「これはこれは。すまないでござる！ ついなんとなくお主らが面白からタメてしまったでござる。ああ、それでなんじゃがあの美少女、どうやらうちのクラス……………四組でゴザルツ！」

「え？」

「本当か？」

「嘘じゃないだろうな？」

と、その言葉を聞いた男子生徒達が信じられないといった表情で呆然としながら口々に呟く。

「あの美少女、ミヤナガユウって呼ばれてたでござるうっ？」

「あー！ 確かにそう呼ばれてたなあ」

「それが有ったんでござるよ。うちの組に『宮永 優』って名前が」

「……………」

「ああ！ 拙者の『天美リスト』によると、ミヤナガユウという同

姓同名の美少女は他に存在しないでござる」

「天美リストってなんだよ？」

「それは拙者が中等部の三年間で必死こいて集めた、天雲学園美少女リストのことでゴザルツ！」

「……………」

男子生徒のグループに話し掛けていたメガネを掛けた変な喋り方の生徒
『山本 友之進』が自信満々に言う。

「拙者の天美リストに抜け目は無いのでゴザルッ！」

「……無駄にカツケエ！」

その話を近くで聞いていた別の男子生徒のグループが、友之進へと話し掛ける。

「俺らにもその話、詳しく教えてくれ！」

こうして一年四組の教室内の熱気は友之進により、急激に加熱されていった。

教室へと向かう途中

優と美結は足早に一階のロビーへと向かっていた。

「なんであなたは、革靴履いてるのよ！」

「仕方ないじゃん！ 京おじさんに呼ばれたり、美結に拉致されたりして、履き替える時間なかったんだよ！」

「二階までは上履きじゃなくても、大丈夫だからいいんだけど、三階以上はダメなのよ」

そんな感じで一度、下駄箱で靴を履き替えてから教室へと向かうこととなった。

一年生の教室があるのは五階。生徒達の教室は学年によって階が別れている。二年生が四階、三年生が三階といった感じで、学年が上がるごとに階は下がるといったようになっていた。

二階から一階。一階から五階へと一気に移動した為か、五階へ着いた時には美結の息は切れていた。

廊下にはもう生徒はおらず、皆、教室へと既に入っているようだった。

「はあ……はあ……どっかのバカのせいでもう疲れたわ……」

「大丈夫美結？」

「あんたねえ……誰のせいであたしが疲れてると思ってるのよ……つてそれより優は疲れてないの？」

「これくらいなんともないよ？」

「普通の男子でも息切れくらいするわよ？」

「そう？ 俺、小学校に上がった時ぐらいから、親父とお袋が仕事忙しくなっちゃってさ、殆ど家にいなかったんだ。……それで親父が『優君。男の子なら凜ちゃんとお家を守らなくちゃいけないんだから、この本よんで強くなつてね！ てへっ！』って、空手やら柔道やら剣道やらのいろんな格闘技の教本を、本屋で買ってきたんだよ……。んで小さかった俺は、それを真に受けて自己流で色々練習してたんだ。それがいつの間にか日課になっちゃってさ、今でも続けてるよ。」

「そうなんだ……。女の子にした張本人がそんなこと言ってたんだ……呆れた」

「全くだよ。あのクソ親父にはいつも上手いこと言われて、騙され続けてたからな。嘘を見極めるのも大分上手くなった俺……」

「なんか大変だったのね……」

「ああ。拳句の果てには姉貴にも色々されたからなあ……」

「凜さん？ 凜さんは良い人じゃん！ 綺麗でやさしくてしっかりしてて、あんなお姉さんあたしも欲しかったなー」

「……姉貴の本当の姿みたら幻滅するぞ……」

っとそんな話をしているうちに、いつの間にか一年四組の教室の前へと辿り着いていた。扉の前に立つと、なんだか教室内が騒がしいことに気が付く。（大体、友之進のせい）

「うわあ……転入してきて、初めて教室入るのって何回経験しても慣れないな」

「大丈夫よ。ただ、うちの学園に転入生が来ること自体、史上初だから、どうなるのかあたしにもわからないけどね」

そうして扉を開こうとして、手を掛けた時、優へと声が掛けられる。

「宮永さん！ 丁度良い所に！」

「はい？」

優が振り向くとそこには知らない顔と知った顔がまたしてもあった。優の姉であり、学園の教師をしている凜の姿が……。

なんて最悪な既視感デジャビュだよ と心の中で愚痴る優だった。

「宮永さんは転入生なんですから、先生の紹介の後に教室に入るのがセオリーでしょう？」

「姉貴……」

「凜さんお久しぶりです。美結です」

「あら美結ちゃん！ 暫く見なかった間に可愛くなっちゃって！」

「み、宮永先生。早く教室に入らないと、ち、遅刻になっちゃいます！」

「あ……。すみません乙川先生」

「では、私はお先に失礼します」

そう言っつて、教室の後ろの扉から先に入っつて行っつてしまふ美結。美結が教室へと入った瞬間、騒がしさが増す教室内。どうやら優が思っつてた以上に教室内のテンションは高いようだった。

「み、宮永さん！ あオトカワエメ……わ、わわわ私が一年四組の担任のしえんせ……先生の『乙川 詠芽』です！」

「それで私が副担任つてこと」

「あ、はい。これからよろしくお願いします乙川先生と姉貴」

傍から見たらどちらが担任の先生なのか分からないような感じで自己紹介を受ける優。詠芽は見た目こそ、普通に綺麗なお姉さんといった感じのだが、そのオロオロとした態度が非常に残念であった。

「コラコラ宮永さん。学校なんだから私のことは宮永先生と呼びなさい」

「……はい。宮永先生」

「くうーっ！ 優君に先生つて呼ばれちやつたのだ！ 優君！ さつき助けてあげたんだからちゅーして！ 絶対ちゅーして！」

言っつているそばから、優に先生と呼ばれた途端、嬉しさ（？）からか普段通り『優君』と呼び始める凜。しかも優が思っつていた通りこのことを言っつてくる。

苦笑しながら凜の背後の詠芽へと目を向ける。

今の会話聞かれてたら色々和不味いなあ。姉貴が変な人に見

られちまう。

そんなちよつぴり見当外れな事シズコンを思いながら詠芽の様子を確認する。

すると幸いなことに詠芽はオロオロとしていた為か、聞こえていないようだった。

そのことにホツとする優。

「姉貴シツカリしろ！ 乙川先生が見てるぞ！」

「……うっ！ 私としたことが、ついうっかりしていた。乙川先生

！」

「……………」

「乙川先生！」

「は、はいっ！ な、なんででしょうか宮永先生！？」

「そろそろ教室に入りましょう乙川先生」

「えっ？ あっ！ は、はい！ そうえば私、担任の先生になったんですね。忘れてました！」

大丈夫か？ あの人の そんなことを優が、心の中で思っていたのは言うまでもなかるう。

オロオロしながら教室の扉を開ける詠芽。扉を開けた瞬間『ヒイツ！』と小さい声で悲鳴（？）をあげて固まる。その背中を押しながら入って行き、扉を閉める凜。

あれじゃあ、どっちが担任か分からないな。まあ姉貴が副担任なら大丈夫だろう と、一人納得する優であった。

そんなことを考えていると、教室の中から『で、でで、では宮永さん入ってください！』という声が、優に掛かる。

優は緊張を振りほどくように、両頬を軽く“ペシッ”と叩く。

「よしっ！ 行くぞ」

そうして全く緊張した様子も無く、微笑みという名のポーカーフ
エイズで教室へと入って行く優だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0629ba/>

女の子の俺は俺で！？

2012年1月9日23時53分発行